

プロローグ

……聖エルマン王国における「蟲使い一族」への酷虐な扱いが、王国を崩壊へ導くきっかけとなったのは周知の事実である。

魔導の大国として古の世界に君臨していた古代ルフテル王国が自らの怠惰と傲慢さによって滅亡した後、中原のルフテルシア一帯は戦乱と混乱の坩堝と化して多くの血が流れた。その混沌はおよそ一五〇年の永きに渡って続き、その間にルフテル王国が誇った魔術や呪術など、超常の力を操る術の多くが歴史の彼方に失われてしまったことは、人類にとって大きすぎる損失であったと言わざるを得ない。しかしながら、当時の人々にとってはそれ以上に、巨大な戦禍によって多くの命が喪われたことの方がより衝撃的だった。

およそ一億人。その数字は、一五〇年の永きに及ぶ混沌によって「人為的」に奪われた人の命の数であって、この当時、老衰や病死といった自然死によって昇天した人は極わずかだったと記録されている。ルフテルシア一帯がこの損失から立ち直るまでにはさらに長い年月と、多くの血と汗と涙、そして苦勞を伴わなければならなかった。

古代ルフテル王国滅亡後、ルフテルシア一帯では多くの国が興り、そして滅亡していったが、王国滅亡から五〇〇年が経過する頃には一応の安定をみた。聖エルマン王国もその頃に建国を果たした新興国家のひとつである。

聖エルマン王国は、元々は小さな宗教勢力のひとつでしかなかった

た。この当時、民は為政者から搾取されるだけの存在であって、多くの人が筆舌に尽くし難い飢えの苦しみに苛まれていた。そんな中、豊穡の女神ウレアを信仰し、地上における女神の代理人として美しき「聖女」を象徴として掲げ、貧民の救済を謳ったエルマン教団の活動は、貧しい人々たちから多くの支持を集めて信徒の数を増やしていった。

エルマン教団が国を興した場所は、辺境に隣接したルフテルシアの北東であった。そこは厳しい環境の土地であったが、作物はよく採れた。地味が豊かだったからではない。虫使いの一族の活躍があったからである。

自然環境における知識が少しでもあれば、農業における昆虫の重要性は語るべくもないだろう。花への受粉はもちろんのこと、益虫による害虫の駆除、幼虫を使った土壌の改良、虫の種類によっては雑草の除去にも役立つし、作物の実りを害獣から守ることも使える。虫使いの一族が聖エルマン王国に協力したことによって、王国は豊かな農耕生産力を手中にし、国力を増大させていったのだった。しかし、当初は蜜月だった両者の関係性は、聖エルマン王国が掲げた「ルフテルシア再統一政策」によって、歯車が狂った機械のごとく、徐々に壊れていくことになる。

聖エルマン王国がルフテルシアの再統一を掲げた背景には、貧困の撲滅という崇高な目的があった。聖エルマン王国がルフテルシアの貧民を救済するために、どんなに支援を厚くしても、それを搾取する悪辣な為政者たちが存在する限り、彼らを救うことは永遠にできないという結論にいたった結果、聖エルマン王国は兵を挙げる道を選んだ。それは狂信的な信念に基づく行為であったと言わざるを

得ないが、この行動は多くの支持を集め、国境を越えて多くの信徒たちが聖女の下に馳せ参じた。

かくして大戦争が勃発し、再統一政策のもと、聖エルマン王国は近隣諸国へ次々と侵略戦争を仕掛けていった。いわゆる「聖戦」の始まりである。

戦争の勃発と時を同じくして、聖エルマン王国は虫使いの一族に戦争への協力を求めた。虫はなにも農業にのみ役立つモノではない。その可能性と潜在能力は無限に等しく、優れた虫使いが使役すれば、偵察、諜報、謀略、暗殺、さらには「兵器」として活用することも可能であって、戦場での活躍が大いに期待できた。聖エルマン王国の首脳陣は彼らの価値を深く理解していたからこそ、戦力としての活用を目論んだのであった。

虫使いの一族は当初、戦争への参加を躊躇った。彼らにとって虫は人殺しのための道具ではない。大切な家族なのだ。しかし、次第に激しさを増してゆく聖戦が、彼らの背中を後押しした。彼らもまた、聖エルマン王国の一員であって、教団の信徒であった。戦場で傷つき、血を流し、志半ばで倒れ、無念を心に抱いたまま死んでゆく同胞たちから目を背けることができなかつたのだ。

かくして虫使いの一族は戦線に立った。そして期待通り、数々の戦果をあげるのだが、その活躍が、皮肉にも彼らをさらなる苦境へと追いやることへつながってゆく。戦争の激化と共に、更なる協力が求められるようになったのだ。

「もっとだ！ もっともっと、もっととツ、もっと力を貸してくれ！ おまえたちの力はそのなものじゃないだろうが！」

戦争初期の段階では対等だった関係も、だんだんと一方的なもの

になっていった。聖エルマン王国は、虫使いたちをさらに働かせるべく、彼らを怒鳴りつけ、時には殴る蹴るなどの暴力を振るい、優しい言葉でなだめすかし、あるいは恐ろしい言葉で脅迫して、最後は「区別」するようになった。時に冷遇し、あるいは過度に優遇することによって、虫使いたちの更なる協力を仰ごうとしたのだ。いわゆる飴と鞭という奴だが、このことで、虫使いの一族は隔絶された立ち位置へと追いやられた。差別への土壌が育まれはじめたのは、おそらくはこの頃が最初であったはずだ。

変化は虫使い側にも生じていた。王国への貢献を重んじるあまり、彼らは虫たちを慈しむ心を封印して、より一層の戦争兵器として扱うようになったのだ。心に鈍い痛みを覚えつつも、彼らはより強力な虫を戦力として投じるために、薬物による品種改良を施し、人為的な異種交配をおこなって、さらには古代ルフテル王国の遺跡から発掘した「呪術」で使役するようになったのである。その結果、虫は「虫」でなくなり、「蟲」になった。それはもはや、怪物だった。かくして虫使いの一族は「蟲使い」となり、王国の要求通り、聖戦への更なる貢献を果たして、聖エルマン王国を完全なる勝利へと導いた。すなわち、念願だったルフテルシアの再統一が叶ったのである。

蟲使いたちは喜んだ。聖戦の勝利はこれ以上苦しまなくて済むという安堵をもたらし、勝利への貢献は褒美でもって報われると考えたからだ。

しかし、現実には彼らが考えているよりも甘くなく、そして残酷だった。

聖戦終結直後、彼らに対する粛清が始まったのである。主導した

のは、民衆の意思を汲んだ「聖女」だった。

聖エルマン王国の聖女は世襲制ではない。彼女たちはあくまでも地上における女神の代理人であって、信仰の対象そのものではないからだ。ただし、聖女として選ばれる者は、若く、国でもっとも美しく、そして女性として魅力的な豊満な肉体を持つ娘であるため、信徒たちの中には天上の女神よりも実在する聖女を崇拜する者も少なくなかった。

聖女はあくまでも象徴であって、実際の国家運営は「枢機卿」と呼ばれる者たちによって執りおこなわれている。つまり聖女とはある種の「飾りモノ」ということになるのだが、それでも聖女の政治的な影響力は絶大を極める。聖女個人は非力な女性でも、その発言力は二千万の信徒を動かす力を持ち、時には老獪な枢機卿たちを凌駕することさえあった。宗教という特殊な背景があってこそ発揮されるこの全体现象は、狂信的な信仰を持つ勢力ほど強い力を発揮する。つつましい心の持ち主であればそれをわきまえて控えめに振る舞うが、そうでない者は暴走する傾向がしばしばみられた。蟲使いの一族の粛清を決めた第一〇八代聖女ナタリアもそのひとりであった。

聖女ナタリアは、彼女が聖女として選ばれる以前から、おぞましい蟲たちを操る蟲使いの一族を生理的に嫌悪していた。これは当時のエルマン国民たちが抱いていた共通の認識感情であって、別に珍しいことではない。聖エルマン王国における蟲使いの一族に対する政策の数々が、そのような印象を国民に持たせる方向に作用していたからである。問題は、そのような感情を抱く人物が、絶大な権力を持ち、民衆と迎合してしまったことである。かくして聖戦を勝利

に導いた立役者たる蟲使いの一族の破滅が決定した。

蟲使いの一族は騙されて集められた。まさに一網打尽という奴なのだが、この時、彼らはまだ、自分たちの身に何が起ころうとしているのか理解していなかった。

「い、いったい……なにが起こっているというのだ？」

彼らは捕縛され、多くの群衆たちが集められた広場に連れてこられた。そしてわけがわからぬまま宗教裁判にかけられると、ろくな弁護の余地も与えられないまま、ほぼ一方的に邪教徒の認定を受けたのである。そして、火炙りではなく拷問による死を与えられた。

火炙りには炎によって魂を浄化するという崇高な意味があるのだが、それすら許さないというところに、聖女ナタリアの生理的な嫌悪感の凄まじさが込められているといえるだろう。女性はよく、頭ではなく感情で物事を判断するといわれるが、これはまさしくその最たる事例であるといえた。

一族が揃って拷問による処刑を言い渡された時、蟲使いの一族は困惑し、呆気にとられ、顔を見合わせてなにかの間違いではないかと考えた。しかし、実際に拷問による処刑が開始され、車輪引きや凌遅刑、ノコギリ引きなど、目の前で一族の者たちが次々と残酷な方法でもって殺され始めると、彼らは全てを理解して、憤怒と憎悪の眼差しで聖女を睨みつけた。

「悪女よ！ 我らがなにをしたというのだ！ 我らは血へドを吐き、多くの同胞と億匹もの虫たちを永遠に失いながらも、おまえたちがはじめた聖戦に協力した功労者ではないか！ この国を勝利へと導いた立役者なのだぞ！ その仕打ちがこれか！ その対価がこの悲惨な末路だというのか！ 恥を痴れ！ この汚らわしい売女が！」

蟲たちの乱入によって広場は大混乱に陥った。その隙に、蟲たちに護られながら、蟲使いの一族は脱出することに成功した。そして彼らはそのまま辺境に走った。いつの日か、聖女と聖エルマン王国に復讐することを心に誓って。

蟲使いの一族の粛清が失敗に終わると、面目を潰されたナタリアは、怒り狂って討伐の兵を幾度となく派遣した。しかし、蟲たちの反撃を受け、討伐が幾度となく失敗に終わっている間に、彼女の聖女としての任期が終わってしまった。

ナタリアの後、新たに聖女の座に就いたユナは、蟲使い一族への討伐を中止とした。討伐隊の被害と犠牲があまりにも大きく、兵士たちから不満の声が強くあがっていたからである。

ユナの後、聖女となったニレナもその政策を支持した。彼女の代になると、蟲使いの一族との諍いは完全に過去のものとなっていた。

ニレナの後、聖女になったのはユフィーという女性である。彼女の代になると、もはや蟲使いの一族の存在は、聖エルマン王国ではほとんど忘れ去られてしまっていて、ユフィーは蟲使いの一族の存在をまったくといていいほど知らなかった。

そしてユフィーの後、第一一二代聖女に選出されたのは、ミリアという娘であった。彼女が聖女に選ばれた時、年齢は歴代聖女のなかでも最年少だった。

ミリアは類稀な美貌の持ち主であると同時に、肉欲をそそる豊かな肉体の持ち主であった。手足は細く華奢でしなやかで、腰部にははつきりとしたくびれがあるにも関わらず、乳房は大きくてまるで西瓜のようであり、柔らかな桃のような尻にもたつぷりと肉が乗っているという、まさに「豊穣」を象徴するような魅力的な肉体の

持ち主であったのだ。そのため、彼女が聖女の認定を受けるに際して、意を唱える枢機卿はひとりとしていなかった。

ミリーアがこれほどまで豊満な肉体を持つにいたった理由は、彼女が育った環境と、なによりも母親からの遺伝の影響が大きいと言われている。なにしろ彼女の母親は、あの聖女ナタリアであったからだ。聖女の座を退いたナタリアは、当時最年少だった枢機卿と結婚し、ひとり娘のミリーアを出産したのである。

ナタリアは娘を金にものをいわせた最上級の環境で養育した。豪華な食事を与え、高度な教育を施し、さらには隣国から取り寄せた怪しげな薬物までも服薬させて、彼女を万人が垂涎するほど魅力的な「女」に育てあげたのである。その目的は、娘を聖女にするためであり、そして自分の自尊心をズタズタにしたおぞましき蟲使いの一族を今度こそ根絶やしにするためであった。

母の意を受け継いだミリーアは、聖女の座に就くなり、未だ辺境の地で蠢く蟲使いの一族を今度こそ討滅することを表明し、自ら兵を率いて聖都を立ったのである。

「お母さま、見ていてください。このミリーアが、必ずやおぞましき蟲使いの一族を根絶やしにして、あなたの恥辱をすすいでご覧にいられますから」

かくして意気揚々と辺境の地へと赴いたミリーアであったが、この時、彼女はまだ、自分に死よりも残酷で恐ろしい未来が待ち受けていることを知らないのであった……。

*

……聖女ミリアの下令によって辺境に潜み棲む蟲使いの一族を討滅するために動員された兵力は七万五千を数えた。その内訳は、騎兵三万、歩兵四万四千、そして聖女直属の護衛部隊一千である。選抜された精兵たちによって構成された軍であり、聖戦終結後に展開された軍事行動では最大規模であった。

ミリアによって率いられたこの大軍は、聖都を出立後、二十日かけて辺境に辿りつき、それから三日間、蟲使いの一族の根拠地を目指して、辺境の奥へ奥へと進んでいった。無数の蟲たちが、その行動を逃さず監視していることに気づかずに。

蟲使いの一族が辺境の地に逃げ込んでからすでに二〇年近くが経っている。この間、聖エルマン王国は、彼らへの警戒を緩めてはならず、常にその動向を警戒していて、彼らの根拠地である「隠れ里」の場所も把握していた。しかし、その場所が、蟲使いの一族が仕掛けた巧妙な「餌」だとは、エルマン軍はまったく気づいていなかった。

辺境に逃げ込んだ蟲使いの一族は、いつ討たれるかもわからぬ恐怖に怯えるような暮らしをしていなかった。彼らは自分たちを利用するだけ利用した挙句、使い捨てるように残酷な死を与えようとした聖女と聖エルマン王国を心の底から憎悪しており、いつか必ず凄絶な復讐を果たすと誓っていたのだ。その訪れた機会を、逃すはずがなかった。

討滅軍に対する蟲使いたちの攻撃は、彼らが特定の場所を通過しつつあったその時に開始された。そこは「隠れ里」に向かうためには必ず通過しなければならぬ場所であり、実はその地下にこそ、蟲使いの一族の本当の「拠点」が在ったのである。

あるという情報は、蟲使いたちには筒抜けだったのである。

ミリーアの身柄は、混乱の最中、蟲使いたちの手に落ちていた。なにが起きたのかわからずに右往左往している間に、首筋に麻痺毒を打ち込まれ、意識を失うと同時にそのまま地下へと連れ去られてしまったのだ。

かくして聖女ミリーアの身に、死よりも悲惨な地獄が訪れることが決定したのであった……………。

尻穴から激しく出たり入ったりを繰り返す。そのつど、ミリーアの腹部が、より大きく、そしてより激しく、膨らんで蠢き動くのだが、その激しい責め苦の惨禍を、ミリーアは歯を食いしばり、半ば白目を剥きながら地面の土を握りしめ、狂いそうになりながら、懸命に耐えていた。

（ま、負け、ない……ぜ、じえつ、だいッ、に……ま、負けッ、りゅッ、もんでずがあああああああああああああああああああああああああああ……ッッッ！）

そう、心の中で繰り返し呪詛のように叫びながら……。

……なぜ、彼女がこのような目に遭っているのか。

刻は少し前まで遡る。

地下世界へと連れて来られたミリーアの周囲に、頭からフードを被った男たちが群がった。蟲使いたちである。暗がり、フードのせいでその表情を伺い知ることはできなかったが、口角の端が吊り上がる形で歪んでいたことから、彼らが笑っていることがミリーアにはわかった。

ミリーアの喉がゴクリとなった。唾液と共に恐怖も一緒に飲み込むと、ミリーアは自分の周囲に群がるフードを被った男たちを睨みつけて問いかけた。

「お、おまえたち……おまえたちは、蟲使いどもね……ッ！」

声や言葉による返答はなかった。しかし、彼らから発せられた目に見えない悪意の波動を感じ取って、ミリーアは自分の質問が是であつたと知ることができた。

けていた全ての衣類を剥奪されて全裸にされてしまった。衣服や下着を剥かれている最中、彼女は必死になって手足をバタつかせ、抗議の声をあげた拒絶の意思を表明したが、多勢に無勢であっただけでなく、麻痺毒のせいで身体が上手く動かなかったため成す術がなかった。

ぼろん。ぶろん。

「おお……！」

衣服を剥いだことで、露になった豊満な乳房と、肉付きのよい臀部は、まだ幼さとあどけなさが残る童顔からは想像もつかないほど見事な魅惑の肉体であり、それを目の当たりにした蟲使いたちの間から、思わず感嘆の声が漏れたほどだった。

ミリーアの顔面が真っ赤に染まった。その瞳には、薄っすらと涙が浮かんでいる。

「お、おのれッ、このおぞましき蟲使いどもめ！ わたくしを裸にしてッ、い、いったいッ、なにをするつもりなのよ！」

衣服を剥かれ、露になった乳房を、痺れる腕で必死になって隠そうとするミリーアであったが、乳房があまりにも大きすぎるため、細腕から肉が零れ落ちてしまい、目的を果たすことがかなわない。まだ陰毛が生い茂っていないアソコに関しては、麻痺している足を使って懸命に隠そうと努力しているのだが、見る角度によっては綺麗なマン筋がはっきりと丸見えのため、その努力はある種の滑稽さを彷彿とさせるものがあつた。

しかしそれでも、彼女は強い意思のこもった瞳で群がり集う蟲使いたちをキッと睨みつけると、不気味に沈黙を守っている蟲使いたちに向かって、怒気と強気がこもった言葉を放ちつけた。

「い、いえッ、答えを聞くまでもないわッ！ お、おまえたちの目的はわかっているわッ！ わ、わたくしを犯し、穢して、辱めるつもりなのでしようッ！ ふ、ふんッ、下種な輩が考えそうだとことだわ！ で、でもッ、わ、わたくしは、たとえどんなにこの身体を凌辱されようとも、決して屈しはせませんわッ！ 誇り高き聖女の名誉にかけてッ、おまえたちなんかには決して屈するものですか！」

声の大きさと混乱した様子が、彼女の内心の動揺を如実に表しているといえるだろう。カチカチと歯が鳴っているのもそのためだ。それを押し隠そうとしたのか、ミリーアはひと通り叫び終えた後、蟲使いたちに向かって唾をペツと吐きかけた。

その唾が蟲使いのひとりにかかった。集団の中央にいた人物で、ひとりだけ色の異なるフードを被っている。

唾のかかったその者が、一步を踏み出した。

「誇り高き聖女の名誉、か」

そう呟きながら、フードを被った男が口元だけで嗤った。邪悪に。

「……ッ！」

白い歯が覗いたその嗤いを見て、ミリーアは背筋にゾツと冷たいモノを感じた。言葉では言い表すことができない不吉な予感を、彼女は本能と肌で感じとったのである。

この時、ミリーアは気づいていなかった。袖から覗いている男の手の平が、薄い紫色の光を放っていることに。

男が、ミリーアに顔を近づけた。そして、無言のまま紫色の光を放っている手を伸ばすと、ミリーアの豊かな乳房を力任せにぎゅうっと強く掴んだ。白い乳房に男の指がメリ込むように深く食い込み、それと同時に「ジュッ」という音がした。呪印が刻まれた音である。

「ひッ、ぐううううッ！」

乳房を掴まれたことによる強烈な痛みと、理由が判らぬ灼けたような痛みを感じ取って、ミリーアは思わず顔をしかめた。その様子を愉しそうに眺めながら、男は言葉を続けた。

「くくくく。我々は、その誇りとやらを踏みにじるために、おまえをここに連れてきたのだよ」

そう言って男は、ミリーアの乳房を掴んだ手に更なる力を込めた。ぎゅううううううううッ、と。

豊かな乳房がさらに歪な形に変形した。ピンク色の乳首がツンと立ち、爪が食い込んだ部分から赤い血が滲み出る。

ミリーアが歯を食いしばりながら顔をしかめた。

「ぐうッ、ぎいいいいいいいいッ！ い、痛いッ！ 痛い
いいいいいいいいいいッ！ こ、この無礼者めッ！ わ、
わたくしの乳房はッ、この世でもっとも高貴なッ、宝物ですよッ！
お、おまえたちのようなッ、ぎゅううううううッ、げ、下賤な
輩がッ、触っていい代物ではなくてよッッ！ は、離しなさいッ、
そ、その汚らわしいッ、手をッ、いぎいいいいいいッ、ど、どけなッ、
さいッッッ！ んぎいいいいいいいいいいいいいいいいいい
いいッッッ！」

懸命に抗議の声をあげながら、乳房を掴んでいる手を必死に剥がそうと、ミリーアは蟲使いの男の腕に爪を立てた。だが、乳房を掴む男の腕力は強く、ミリーアの非力ではビクともしなかった。

「くくくくく……」

その様子が滑稽だったのか、男はまた低く笑った後、ミリーアの乳房から手を離した。

解放された乳房には、くっきりと赤く手形がついており、爪が食い込んでいた場所からはツートと滴るように血が流れた。またこの時、乳房に、紫色の文字で、古代ルフテル語で「奴隷」を意味する言葉が浮かんでいたが、それはすぐに溶けるように消えてしまったため、ミリーアが気づくことはなかった。

「は、はあ、はあ、はあ……う、ううう……」

ミリーアは、強く握られた乳房を庇うように抱きかかえながら、自分に辱めを与えた男をキツと睨みつけた。

「こ、この屈辱……、決して忘れませんわッ！ おまえは絶対にッ、絶対ッツツ対にッ、絶対に許しませんッツツ！ か、必ずやッ、この世に存在するありとあらゆる苦痛を与えて殺してやりますわッ！ 覚悟しておきなさいッツツ！」

それは間違いなく渾身の脅迫であった。もし、男がエルマン王国の国民であり、聖女たるミリーアにそのようなことを言われれば、震えあがって平身低頭し、地面に頭を擦りつけて慈悲と許しを乞うていたに違いない。

しかし、乳房を握りしめた蟲使いの男には通用しなかった。

「この世に存在するありとあらゆる苦痛、か。うん、それは良い案だ」

男が口元だけでニンマリと嗤った。

男はミリーアに名乗らなかったが、彼にはメジェドという名前がある。当代蟲使いの長を務める者であり、聖女ナタリアの蛮行によって生みの親をノコギリで、名付けの親を車輪引きで殺されたという過去を持つ。聖女と聖王国に復讐するために、古代ルフテルの呪術を習得した呪術師でもある。得意技は、呪印を通しておこなう「思

考行動の制限」と「深層心理の操作」で、呪印を施された当人は、それと気づかず、自我と意識を保ったまま、メジエドの思惑に沿った行動をとるようになるのである。

そうとは知らず、そんな男に向かってミリーアは、「この世に存在するありとあらゆる苦痛」を与えると行ってしまったのだ。これがどのような結果を招くか、少し考えればわかるだろう。

メジエドが口元だけで嗤いながら、ミリーアに愉しそうに告げた。その様子はさながら、玩具で遊ぼうとする子どもようだった。

「では、これよりおまえにソレをくれてやるとしよう。泣いて、喚いて、七転八倒苦しんで、脳ミソが自壊して溶け尽くすまで、この世に存在するありとあらゆる淫惨の宴を存分に愉しんでくれたまえ」それはある種の宣戦布告であった。

……かくしてミリーアは、身体を拘束された後、肛門を拡張され、長大な体軀を誇るムカデたちに鬨り尽くされるといふ拷問めいた恥辱を味わう羽目になったのであった。

激しい肛虐は、相も変わらず続いている。

ぐぞるじゅるるるるるるるるるるるるるるるる……つつつ！

ぶじゅるぐぎゅぢゅるるるるるるるるるる……つつつ！

汗気を帯びた淫猥な音が木霊して、耐え堪えるような女の絶叫がそれに重なった。

「んぐぎいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
ツツツ！　ぐふーツ、ふーツ、ぎふううううううううううううう
うううううツツツ！　んぐぐぐぎいいいいいいいいいいいいいい

「いいいいいいッッッ！」

すでに何時間、ムカデの大群に腸内を責め弄られているだろうか。当人たるミリーアにはもはや見当がつかなかったが、それでも腸内蹂躪は一瞬の暇を置くことなく続いている最中だ。

ずぼるぐぢゆるじゆるるるるるるるるるるる……つつっ！

ぐぢゆるぐぢゆるぶぢゆるるるるるるるるるるる……つつっ！

粘液状の腸汁が、ムカデたちの動きに合わせるようにして、びちやぶちやと盛大に噴き零れ、激しく辺りに飛散する。拡張された肛門が痛々しく腫れあがり、裏返って外に飛び出ってしまったている腸肉は、もはや中に戻る気配がない。

それでも、ムカデたちによる責め苦はまったく終わる気配がなかった。

ぐぢゆるぶぢゆるぢゆるぐぢゆるるるるるるるるるるる……つつっ！

ぶぎゆるぢゆるぢゆるぢゆるるるるるるるるるるる……つつっ！

淫猥な音を響かせながら、長大な体軀を誇るムカデ状の蟲たちが、まるで競い合うようにして、ミリーアの腸内を行ったり来たりを繰り返す。身を絡ませあいながら、おびただしい数の脚で腸肉をひっかきまわして、肛門から出たり入ったりを繰り返すのだ。

そのつど、ミリーアの腹部が、腸内で暴れ狂うムカデたちの形にぐねぐねと奇怪に膨らみ蠢いて、内臓がねじ切れるような激痛と苦しみに、そして猛烈な不快感を責められる当人にもたらしめて止まないのであった。

しかし、これほどの責め苦を受けているにも関わらず、ミリーアの瞳からは、まだ強い意志の輝きが喪われてはいなかった。

ミリーアは、拳を強く握り締め、歯を食いしばって、咆えるよう

